
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 156

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3101. ノルウェーの記憶から
- 3102. 最後の言葉と内面世界を舞う蝶
- 3103. TOEFL対策の詰め
- 3104. 五年振りのハーバード大学教育大学院への訪問
- 3105. 空を流れゆく雲を眺める余裕
- 3106. 不思議な夢
- 3107. ニュージーランドの砂浜から
- 3108. 極限に向かって
- 3109. 日記と核心:TOEFLリスニング対策
- 3110. 教育哲学への思い
- 3111. 学び直しに向けて
- 3112. 生涯学習の大切な側面
- 3113. 短調の曲に関する発見と火災報知器
- 3114. 覚悟について
- 3115. 真の問題解決を可能にする知性
- 3116. 安全基地の育成
- 3117. オーロラのような夕日の美しさ
- 3118. 秋晴れの午後より
- 3119. 動き出す予感
- 3120. TOEFL対策の仕上げ

3101. ノルウェーの記憶から

ちょうど先ほど、一日分のコーヒーを入れに行くためにキッチンに向かい、コーヒーマシーンを動かし始めた時に、キッチンの窓から外の様子を眺めた。少しばかりそこで立ち止まり、何気なく通勤や通学に向かう人たちの様子を眺めていた。

時刻は八時半に近づいており、すでに辺りは明るいのだが、通りを行き交う車はヘッドライトを少しばかり点灯させている。自転車に乗る人たちの格好は、もう秋のそれであり、暖かい格好をしながら自転車を漕いでいる。それもそのはずで、ここ最近早朝の気温が10度前半にまで下がっている。三羽の白い鳥たちが大空を舞った姿を見たところで、一日の活動をこれから本格的に始めていこうと思った。

まずは、早朝の習慣である、過去の日記の編集とそれに合わせてデッサンを行い、一曲ほど作る。今日は久しぶりにドビュッシーに範を求めてみようかと昨夜の段階で思っていた。すでに書斎の机の書見台には、ドビュッシーの楽譜が置いてある。そうした準備をして、昨夜就寝していた。

これまでドビュッシーの曲を参考にする際には、どこか難しさを感じていたが、昨夜突然、ドビュッシーに範を求めてみようという気持ちになった。昨日は何かの転換点だったのかもしれない。それはとても小さなものなのだが、間違いなく自分の中で、また一つ何か小さな変化が起こったのだと知る。それは行動にも表れており、北欧旅行の最中から昨日に至るまで、私はずっとシベリウスの曲を聴いていたが、今日からは聴く音楽を変えた。北欧の作曲家という点では依然として変わりはないが、今日からはグリーグのピアノ曲を聴くことにした。

グリーグのピアノ曲を聴くたびに、今年の夏に訪れたノルウェーの記憶が蘇ってくる。特に、ベルゲンの町を訪れ、グリーグが住んでいた邸宅を訪れた時の記憶がありがたくと蘇ってくる。あれからもう一年以上の時間が過ぎたのだ。あの時はまだ作曲を始めておらず、その時は、その年の春にザルツブルグで得られた啓示的なメッセージすら忘れていたように思う。だが、グリーグ博物館を訪れ、ベルゲンの地でグリーグの生涯を辿ったという経験が、後々に作曲をし始めたことの一つの触媒になっていたのは間違いないだろう。書斎の中に流れるグリーグの曲を聴きながら、ふと今年の出来事を思い出していた。

いよいよTOEFL試験が今週末に迫ってきた。TOEFLは確かにGREに比べて有効期限が二年間と短い、GREと同様に、今回のTOEFLも最後の受験としたい。

今日はリスニングの問題を解くことをせず、その代わりにリーディングセクションの問題群を二つほど解き、スピーキングセクションの問題を一セットほど解きたいと思う。とにかく最優先にするべきはスピーキングセクションであり、形式に慣れることは随分と進んだため、後は一日に一セット問題を解くことによって、より一層形式に慣れていくことをしていきたい。

また、時間に余裕があれば、今日はライティングセクションの対策を少しばかり行う。GREのライティング対策をつい先日までしていたこともあり、TOEFLのライティングに関してはほとんど対策は必要ないのだが、改めてその形式に慣れておくことと、このセクションのポイントを見落としていないかどうかを関連動画を見つけて確認していく。土曜日のTOEFLに向けて、ここから試験に向けて細かな点を詰めていきたいと思う。フローニンゲン:2018/9/10(月)08:45

3102. 最後の言葉と内面世界を舞う蝶

昨夜から今朝方にかけて十分な睡眠を取ったにもかかわらず、どこか活動に鈍さが見える。先ほどドビュッシーの曲に範を求めて作曲を試みたが、どうもうまくいかず、生まれた曲は今感じている鈍さを表すようなものだった。流れるようなダンスではなく、まるでダンスの破片のようなものが内側に留まり続けているかのような感覚があり、それがそのまま曲として表現された。こうした状態も一時的なものだとわかっている、こうした時こそ、ゆっくりと物事を進めていくのが賢明だろう。

今から少しばかり、今の自分が最も読みたいと思う書籍を読んでいく。シュタイナー教育に関する書籍を読んでいこうと思う。

先ほどまでは朝日の光が地上に優しく降り注いでいたのだが、今はまた空が雲に覆われている。早朝には吹いていなかったような風が吹き始めている。それは強くないのだが、どこか寒さを感じさせる風だ。

早朝、「あの人の最後の言葉は何であったのだろうか。自分の最後の言葉は何なのだろうか」ということを考えていた。なぜそのような考えが生まれてきたのかはわからない。

私たちの心は本当に予測困難な複雑な生態系である。心の世界のどこかで蝶が舞う時、それはいつか全く予想のしない心の場所で台風を引き起こすかもしれない。人間の心の複雑性を改めて思い知る。

自分が発した最初の言葉は何であり、最後の言葉が何なのかに関する関心。人は必ず最初の言葉を発し、そして最後の言葉を発する。一体、自分はこの人生の最後に何と言葉を発するのだろうか。最初の言葉から最後の言葉に向かっていく旅。それが人間の人生なのかもしれない。

外側の世界がいかに雲に覆われていようとも、内側の世界がいかに雲に覆われていようとも、自分にできることはゆっくりと進むことである。ゆっくりとでいい。時に立ち止まりながら、ゆっくりと歩みを進めていく。

日々雑多なことを考え、様々な感情が内側の世界に生起する。そうした中で、時に自分がどこに向かっているのかわからなくなることがあるが、そもそもどこに向かっているかなどわからなくて当然だ。

この広大な心の世界のどこかで蝶が舞えば、今の自分には全く予想のつかない場所でその蝶は再び舞うだろう。いや、その時にはもはやそれは蝶の形をしていないかもしれない。それは一つの思いや考えに変容し、一つの心象イメージに変容している可能性が十分に考えられる。一匹の蝶が内側の世界で舞い、それは転生するのだ。私たちの内面世界の物語は、きっとそのように進行している。

念のため、自分が今いる場所を確認しておこう。今私はオランダ北部の町、フローニンゲンにいる。フローニンゲンの自宅の書斎でこの日記を書いている。いつかこの日記が、今の私には全く想像できない何かに変容している姿がどことなくイメージされる。それが何なのかは誰にもわからない。フローニンゲン:2018/9/10(月)10:48

3103. TOEFL対策の詰め

時刻は午後五時半に近づきつつある。今日も計画通りに諸々の仕事を進め、TOEFL対策も順調であった。北欧旅行から戻ってきて本格的にTOEFL対策を始めたおかげもあり、随分と対策が進

んだ。特に今回はリスニングセクションとスピーキングセクションの対策をこれまで以上に充実させ、今はかなり手応えを感じている。もちろん、リスニングセクションにおいてはまだまだケアレスミスが生じることがあり、なかなか満点を取ることができない。これから今週末の試験に向けては細部を詰めていき、本番で最大の集中力を発揮できるように調整を行っていく。スピーキングに関しても、過去にTOEFLを受験していた時には、自分の回答が随分と抽象的なものであったことに気づく。特に、設問の1と2に関してはそれが顕著であった。

改めて評価ポイントを確認してみると、いかに具体的な事例を盛り込み、話の内容をいかに膨らませていくかが大事だということを知り、今回はその点に特に気をつけて回答したいと思う。対策のおかげで、抽象的な内容を話すのではなく、具体的な事例を用いながら話をする癖が随分とついてきた。これまでどうしても大学院の中で学術的な議論をすることに慣れていたため、極度に身近な話を例に挙げながら話す機会がそれほどなかった。そうしたことが自然と私のスピーキングスタイルを確立し、残念ながらそれはTOEFLのスピーキングという文脈においては高い評価が得られないものだった。今回は改めて評価ポイントに立ち返って対策をしたことにより、これまで頭打ちであったスコアを伸ばすことができればと思う。

今日はリーディングとライティングの対策も行った。GRE対策を先月まで行っていたため、TOEFLのリーディングは随分と簡単に思える。だが、その分ケアレスミスには気をつけなければならない。今日改めて問題を二つほど解いてみたが、時間に随分と余裕があった。本番では焦ることなく問題を解き進めていきたい。一方で、ひとたび解答をしたらもうそれ以上は迷わず次の問題に移っていくことも大切になる。時間的に余裕があるとはいえ、あまりにも余裕を持たせていると時間がなくなってしまうということも起こりうるからである。

即座に回答していく問題と、引っかからないようにゆっくりと回答していく問題のメリハリをつけていきたい。ライティングに関しても、すでにGREで十分な対策をしていたため、それほどやるべきことはない。ただし、TOEFLに固有の問題に対応するように感覚を慣らしておくことは大事である。また、ライティングの設問1と2の双方に関して、これまでとは違う形でイントロダクションを書いていきたいと思う。

設問2に関する様々な解説動画を見ていると、どうやら冒頭の一文はあえて自分の主張を明確に打ち出すのではなく、トピックの概要を示し、そこから自分の意見を述べ、その後続く段落では十分な論拠と具体例を挙げていくことが大事であると学んだ。これは設問1においても同様であり、設問1では自分の意見を求められることはないのだが、冒頭の一文は読解文とリスニングの内容を一言でまとめるような内容にしたいと思う。リーディングとライティングについてはいつも安定した得点を取れているため、土曜日の本番に向けて、水曜日と金曜日に再度対策を行うに留める。

火曜日と木曜日はリスニングの対策に集中し、スピーキングに関しては土曜日まで毎日対策を行っていく。そうすれば、土曜日の本番の試験の問題を楽しみながら解くことができるだろう。フローニンゲン:2018/9/10(月)17:37

3104. 五年振りのハーバード大学教育大学院への訪問

新たな週の始まりである月曜日が静かに終わりに向かっている。時刻は午後七時半を迎えた。

今この瞬間のフローニンゲンの空は曇っている。幾層かにまたがる雲がゆっくりと進行している姿が見える。

そういえば今日は、午後に書斎の窓の外に静かに佇む赤レンガの家々を眺めていたことを思い出した。そっと目を閉じてみると、それらの赤レンガの家々がゆっくりと行進を始めるかのような心象イメージを見ていた。今、それらの赤煉瓦の家々はどっしりとした構えでそこに佇んでいる。

北欧旅行から戻ってきて日が浅いが、今月末には五年振りにボストンを訪れる。今私が最も関心を寄せている芸術教育と教育哲学について研究をしている学者がハーバード大学教育大学院(HGSE)に何人かいて、彼らと会って話をする機会を得た。もちろん、ボストンに行くのはHGSEの教授陣たちと話をするだけではなく、ボストン美術館を訪れることや、ヘンリー・デイヴィッド・ソローが生活していた森を訪れるためでもある。とはいえ、HGSEの教授陣たちに会い、そして幸運にも彼らのクラスに参加させてもらえることは非常に貴重な体験になるだろう。

9/27にアムステルダムを発ち、その日の午後にボストンに到着する。アムステルダムからボストンまでは、およそ七時間ほどのフライトである。

欧州に渡ってから、今回初めてアメリカ大陸に行くことになる。アムステルダムとボストンの間には時差が六時間ほどあるため、オランダの時間で正午の便に乗り、ボストンには昼過ぎに到着することができる。

ボストン当日の翌日に、HGSEの芸術教育プログラムのディレクターを務めるスティーブ・サイデル教授のクラスに参加する。このクラスは、芸術教育の哲学的・実務的側面を探求するものであり、まさに私の関心に合致している。

サイデル教授は親切にもこのクラスに私を招待してくださり、10/3の午後には改めて一対一で話をする機会を得た。そこでは、HGSEで提供されている芸術教育のプログラムが自分の関心にどれだけ合致しているのかを確かめるような質問をしたいと思う。また、もう一人面会する機会を得たのは、教育哲学者のキャサリン・エルギン教授である。幸いにも、エルギン教授が提供する芸術理解に関するクラスにも参加させていただくことになった。

その準備も兼ねて、エルギン教授の最新書籍“True Enough (2017)”を数日前から読み始めているが、これが実に難しい。もちろん、本書が私の関心に触れていることは間違い無いのだが、認識論に関する私の理解が浅いため、本書を読み進めていくことはなかなか難しい。しかしながら、随所に目を見開かせてくれる文章があるため、毎日一章ずつ読み進めている。本書を読みながら、わからないことに向かっていくのが学習の肝なのだと改めて思った。

確かに、私たちはすでにわかっていることから徐々に理解を広げていくが、得てして自分がすでにわかっていることの範囲から出て行かない人が多いことも確かだろう。それでは学習の幅も深さも広がっていかない。

今回エルギン教授のクラスに参加し、一対一で話を伺おうと思ったのは、まさに彼女が専門にしていることと今の私の関心が合致しているのみならず、今の私の理解の範疇を遥かに超えるような叡智をエルギン教授が持っているからでもある。

今月末のHGSE訪問に備えてエルギン教授の書籍を何度か読み進めたいと思う。ボストンの町で自分の内側の何かがまた開き、そして自分の人生がまた新たに動き出していく予感がする。フローニンゲン:2018/9/10(月)19:51

3105. 空を流れゆく雲を眺める余裕

昨日に引き続き、今朝もまた七時を過ぎた時間に起床した。ここ最近では九時間近く睡眠を取る日が続いている。何か自分の内側で大きな調整が起きているように思える。

今朝も昨日と同様に、空が雲に覆われている。昨日のこの時間帯の雲よりも幾分薄く見えるが、今日は午後から小雨が降るようだ。

チーズが切れてしまったため、今日はチーズ屋に行く必要があり、それは昼食前に済ませておきたいと思う。また、ここ最近では毎週足を運ばなくなったインドネシア料理店に久しぶりに行き、昼食を購入したいと思う。

一日の活動を始める前には、必ず書斎の窓の外に広がる景色を眺めている。その日の空の様子、風の度合い、小鳥の鳴き声、道行く人たちの様子など、観察する点は数多くある。今日は雲が多いだけではなく、どうやら風も強いようだ。以前、クリシュナムルティの書籍を読んでいる際に、「空を流れゆく雲を眺める心の余裕」の大切さに関する記述と出会ったことを思い出す。本当にそうした心の余裕の大切さをつくづく感じさせられる。

窓の外に広がる景色を眺めていると、心が深く落ち着く。さらには、色取り取りかつ千変万化する景色の様子は、私たちの内側の世界の様子と対応しているかのようであり、景色を眺めることが意識の変容につながっていることも実感する。

今日も景色を眺めながら、景色に支えられる形で一日の仕事に取り組んでいくことになるだろう。シベリウスが日々、書斎の窓からアイノラの自然を眺めていたのと同様に、今日も、そして今後も窓の外に広がる景色を見ながら自分のライフワークに取り組んでいく。

昨日は、シュタイナー教育に関する書籍と、教育哲学者のキャサリン・エルギン教授の書籍の双方を読み進めることができた。今日もそうした読書の時間を確保し、二冊の続きを読み進めていきたい。読書に関しても、ゆっくりと前に進めていく。少しずつ自分が理解できない世界を理解していくようにする。そこには焦りは必要なく、落ち着きとゆとりが必要となる。また、物事をゆっくり進めていこうとする意思も必要になるだろう。

読書、そして作曲実践に並行して、今日もまたTOEFL対策を行う。土曜日の試験まであと少しとなった。

今日は午前中にスピーキングの模擬試験を一セット解く。納得のいく回答ができるまで何度も繰り返しスピーキングを行う。明日以降も同様なことを行っていく。また、スピーキングの設問の中で特に対策が必要だと思う箇所については重点的に対策を行うようにする。今日はリーディングとライティングの問題を解かない代わりに、リスニングの模擬試験の問題を一セットほど解く。TOEFL対策に関しても計画通りに進んでおり、本番に向けて着実に準備が整いつつある。フローニンゲン:2018/9/11(火)08:31

3106. 不思議な夢

起床して一時間ほど経つが、今朝方の夢の内容について少しばかり覚えている。夢の中で私は、今住んでいる家からどこか別の場所に引っ越すことになっていた。どういうわけか、母方の祖母と一緒に良い物件はないかとあれこれ探していた。ある古びた駅のプラットホームに私は立っており、そこから列車に乗って、良さそうな物件のある町に向かおうとしていた。

その駅が田舎にあるためか、列車の本数は非常に少なく、しばらくの間プラットホームでとりとめもなく時間を過ごしていた。次の列車の時間が近づく頃になって、ようやく何人かの人がプラットホームに姿を現し始めた。すると、今いるプラットホームとは別のプラットホームにすでに黄色い列車が停まっていることに気づいた。「もしかしたらあの列車に乗る必要があるのかもしれない」と私は思い、その列車の目的地を確認した。

どうやらその列車は私が行きたい場所には止まらないらしい。それに気づいたとき、ふと先ほどのプラットホームに目をやると、どうやら列車がやってきたようだった。その列車の色もまた黄色だった。

その列車の目的地を確認すると、どうやらそれが正しい列車のようであり、列車に乗り込み、私は目的地に向かっていった。車内にはまばらに人が乗っていることはわかったが、どの人もそれほど存在感がない。かといって、車内の雰囲気は暗いわけではなく、太陽の光が窓を通り抜けて車内に降り注いでいた。数十分ほど列車に乗ると目的地に着いた。

私は目的の物件に立ち寄る前に、その町の博物館に足を運ぼうと思った。駅から博物館までは歩いてほんの数分であるから、携帯の地図を確認することなく、頭の中に記憶した地図を頼りに駅から博物館に向かった。

町の風景は見慣れないものであり、それは日本的でもあり、西洋的でもあった。私が歩いている道には誰一人として人がいなかった。紆余曲折した入り組んだ道を歩いていると、とても不思議な空間に行き着いた。そこは地上から地下に自然と向かっていくような空間であり、一つの建物のような作りをしていた。一見すると建物のように見えるのだが、入口らしきものはなく、外に開かれた空間だけがそこにあった。

その空間に一步足を踏み入れてみると、部屋のような空間が現れ、同時に傾斜のある道が足元に現れた。その坂道をゆっくりと下りながらも、その空間は部屋であったこともあり、部屋の内装を見ながら歩いていた。すると、私は行き止まりに行き着いた。その空間は、どうやら基督教の信者たちが祈りを捧げる場所のようだった。

天井付近の右横の壁にはステンドグラスがあり、そこから黄色い光がわずかばかり差し込んでいた。誰も入っていない白い棺がその部屋の中に置かれていた。

行き止まりに行き着いてしまったため、私は引き返すことにした。来た道を歩きながら、「数世紀前には、あの場所で多くの人たちが祈りを捧げていたのだ」ということをぼんやりと考えていた。

この不思議な空間から外に出た時、私は改めて携帯の地図を確認した。すると、少しばかり道を間違えているようだった。だが幸いにも、目的の博物館は目と鼻の先である。博物館に到着すると、私はチケットを購入した。

どうやら特別展示のチケットは別に購入する必要があるらしく、合わせてそちらも購入した。ただし、受付の方が一言、「そちらの特別展示には今は誰も人がおりませんので、どうぞごゆっくり」と述べたことが印象に残っている。その印象を持ったまま、私は特別展示のセクションに向かった。現代の写真家が撮影した俗な写真ばかりがそこに展示されており、少々私は落胆した。この落胆の感情を持った時、私は本来の目的地である目星の物件の中にいた。そこはリゾートホテルのようであり、一

階にはレストランがあり、オレンジジュースやコーヒーを自由に飲めるスペースがある。この建物の上層階がホテルではなく、賃貸物件となっており、私はそこに住もうとしていた。

ホテル暮らしというのはあまり落ち着かないが、ホテルのような物件で生活を送れることは悪いものではないと思った。毎朝、ホテルの一階のレストランで朝食を摂り、好きな時間帯に自由にコーヒーやジュースを飲めるというのは有り難かった。また何よりも、その物件は自然に囲まれており、上層階からは海も山も眺めることができる。いつの間にか私はこの物件に住むことを決め、さらには荷物の搬入も終えているようだった。

ガラス張りのエレベーターに乗り、取り巻く景色を眺めながら上層階から下に降りている最中、その場所は日本であることに気づいた。また驚いたことに、そこが新宿区だということにも気づいた。地上階に到着した時、夢から覚めた。フローニンゲン:2018/9/11(火)09:01

No.1307: Recollection of a Rainbow

I'm recollecting a rainbow that I saw last month. Although arts that human beings make have intrinsic beauty, nature also has unique and mysterious beauty. Groningen, 07:42, Thursday, 10/11/2018

3107. ニュージーランドの砂浜から

時刻は午後七時半を迎えた。ここ最近夕食後のこの時間に日記を必ず書いているように思う。結局今日は午後に雨が降らず、天気予報が裏切られた形となった。

今改めて天気予報を確認すると、これから明日の午後にかけて雨が降るようだ。今日の昼食前に、行きつけのインドネシア料理店に向かっている最中に、通りの街路樹が随分と紅葉していることに驚いた。自分の自宅の街路樹以上に葉が黄色になっているものを多数見かけた。季節が本格的に秋に突入しているようだ。

就寝まであと数時間となったところでふと、今朝方の夢について思い出した。早朝に一つの夢について日記を書き留めていたのだが、もう一つ夢を見ていたことを改めて思い出した。

夢の中で私は、日差しの強い砂浜にいた。どうやら季節は夏のようにあり、気温は高かった。しかし湿度が低いためか、それほど嫌な暑さではなく、むしろ心地良さを感じさせるような暖かさであった。砂浜をしばらく歩くと木陰を見つけ、そこで一休みすることにした。みるとその木陰は長く遠くの方まで続いており、多くの人たちがそこで休んでいた。そこに数人の日本人の姿を見かけた。

偶然彼らの目の前を通りかかった時、どうやら私たちは知り合いのようであり、一人の人が私に声をかけた。それほど深い仲ではないのだが、どこかで顔合わせをしたことがあるぐらいの関係性であり、その人たちの名前を私は知らなかった。どうやら彼らはこの土地に移り住んで長いらしい。そこで再び眩しい太陽の光を感じた。太陽の方を見上げると、一人の男性が口を開いた。

男性A:「ニュージーランドの太陽は美しいでしょう？」

私:「ええ、そうですね。この土地固有の輝きがありますね」

女性A:「私たちもこの土地の太陽の輝きに惹かれてここに移民することにしたんです」

その男性が口を開いて初めて、私はこの場所がニュージーランドだと知った。だが確かに、そこがニュージーランドであるような雰囲気はどことなく感じていた。

彼らはニュージーランドの気候に惹かれてこの土地に移り住むことにしたようだ。ハンモックに腰掛けていた女性が言葉を発したとき、ニュージーランドをとっても気に入っている様子すぐにわかった。

私は木陰から太陽の方を仰ぎ見て、砂浜に吹き抜ける爽やかな風をしばらく感じていた。そのような夢を今朝方見ている。時刻はもう夜にもかかわらず、今朝方の夢について思い出すことができたことに少しばかり驚かされる。私はニュージーランドに一度も訪れたことはないのだが、夢の世界のニュージーランドは確かに常夏のリゾート地のように感じた。しかし、夢の中の男女が述べていたのは違う感覚を夢の中の私は持っていた。太陽の輝きは美しかったのだが、それがどこか人工的なものに思えたのである。実はそのようなことを夢の中で感じていたことを改めて思い出す。

夢が通った跡が自分の内側にまだ強く残っているような感覚がする。今夜はどのような夢を見るだろうか。フローニンゲン:2018/9/11(火)19:43

No.1308: A Morning Cold Wind

When I opened the window of my study in the early morning, a cold wind came into the room. So cold days will come soon that I cannot open the window. Groningen, 07:55, Thursday,

10/11/2018

3108. 極限に向かって

今日は夕方に、時間の流れが鋭利に素早く流れ、同時に時が勾玉のように丸く流れていくような感覚がした。時間の流れと内側の感覚は対応しており、時間の流れも一様ではないことがわかる。様々な速度があるだけでなく、時間にも固有の色や形がある。夕方に感じていた時間感覚がそれを物語っている。

今日も午後に、キャサリン・エルギン教授の“True Enough (2017)”の続きを読んでいた。毎日一章を読み進めており、もう少しで半分読み終わる。エルギン教授が専門としている認識論について、私の理解が浅いため本書を理解することはなかなか難しいが、主要な論点がどれも私が深く考えていきたいと思うようなものであり、毎日興味深く本書を読み進めている。

どのような書籍でもそうであるが、一読しただけでは書籍の内容を十分に理解することができないであろうから、繰り返し本書を読みたいと思う。本書は味読するに価する内容を持っており、本書と繰り返し付き合うことが、まだ開拓されていない自分の知性領域を押し広げてくれるように感じている。

現在本書と並行して読み進めているシュタイナー教育に関する書籍は、「知る喜び」を与えてくれる内容である一方で、エルギン教授の書籍は、「考える喜び」を与えてくれる内容だ。もちろん、前者には後者の喜びがあり、後者には前者の喜びが内包されていることは確かである。だが、大きな分類をすれば上記のようなことが言えると思う。

今月末にボストンを訪れた際に、ちょうどエルギン教授のクラスに参加させていただけることになり、さらには一対一での面会の機会も得たため、いろいろなことを質問したいと思う。エルギン教授の専門は認識論のみならず、教育哲学も専門であるため、今回の機会を通じて、私はまた新たな方向性を得ることになるだろう。

早朝に雑多なことを考えていたことを思い出す。その中でも一つ、極限に向かっていくことの大切さについて考えていた。人が何と言おうと、自らが決めた道、いや自らに与えられた道を極限まで歩んでいこうという思い。そのような思いが突然湧いてきた。

人は極限に向かう人間を嘲笑するかもしれない。その様子はどこか、地球が平坦だということを信じていた人たちにとって、地球が丸いことを証明するために航海に出た人を馬鹿にする様子に似ている。

人が歩く道というのも、実は永遠に続くものでありながらも、地球のように丸いものなのではないかと最近思う。つまり、道の極限まで行くと再び始点に戻ってくるのではないか、ということだ。

多くの人は果てしないところに向かって歩いている人に敬意を払うか、嘲笑するか、はたまた道から引きずり降ろそうとするかのいずれかを行う。自分に与えられた道を極限まで歩いていこうと決めたのであれば、多くの人が行うそれらのどれにも関わってはならないのだと思う。

極限まで進むこと。それは自己に回帰することなのだと思う。

日々極限に向かって歩いているというのは、結局は自分に向かっているということだったのだ。フローニンゲン:2018/9/11(火)19:59

No.1309: The Sunset-Like Morning Sun

I can see the sunset-like morning sun. Receiving the energy from the sun, I'll start my today's work. Groningen, 09:02, Thursday, 10/11/2018

3109. 日記と核心:TOEFLリスニング対策

毎日毎日、日記を書き綴りながら日々の歩みを少しずつ前に進めているつもりでいるが、果たしてそれはどれほど進んでいるのかが少々気になった。人間が自己を深めるということの大変さ、そしてその速度の緩さに改めて直面している。だが、日々の歩みがいかに遅くても、昨日と今日の自分の立ち位置を絶えず確認することが自分にとってとても大切な実践になっている。自分が今日、昨日の地点からいかなる歩みをどれほど行ったのか。どこに障害物があり、その障害物につまづいた要

困や、それを乗り越えることができた要因は何だったのか。本日止めた歩みの先に待つ、明日の歩みはどのようなものなのか。そのようなことばかりを日記に書き留めているように思う。

昨日、今日、明日という三つの時間だけではなく、それこそ遠い過去や遙か先の未来についても書き留めることがある。もはやここまでくると、なぜ自分がこれほどまでに日記を書いているのかわからなくなってくるが、それでいいのだと思う。自分にとって本当に大切なことは理由を超えるのだから。

「日記を書く意義について説明せよ」という記述式の問題が出題されれば、いくらでも回答を書くことができるだろう。しかしそこで記述された項目のどれも、確かに重要なものでありながらも、核心を掴むには至らないように思う。核心は知的理解の範疇を超えており、知的理解を極地まで推し進めた末に生まれる直感や身体感覚によって把握されるようなものなのだと思う。

これからも、いついかなる場所で何をしていても日記を書き綴っていくだろう。なぜなら、日記を書くことは自己の核心に触れる事柄だからだ。今はそのようなことしか言えない。

今日もTOEFL対策を計画通りに行った。スピーキングについてはかなり良い仕上がりになってきているように思う。ここからさらに形式慣れをして本番を迎えれば、納得のいくスコアが取れるように思えてくる。今日もこれから少しばかりスピーキング対策を行いたい。リスニングに関しては、やはりまだケアレスミスが出てしまうような状態だ。とにかくレクチャーをいかに集中して聞くかに焦点を当てながら、そもそもリスニングの問題の大きな構造を再度把握しておきたいと思う。

とても基本的なことだが、どの問題文にも必ずメインピックがあり、そのトピックに関するサブピックが続いていく。こうした大きな構造を絶えず頭の中に置きながらリスニングの問題文を聞くことによって、まずは大きな流れを見失わないようにすることが大事だ。その他には、リスニングの問題のパターンはいくつかに分けられ、それらのパターンごとに聞かれることはおおよそ決まっていることを理解しておくことも大事だろう。これから試験に向けては、リスニングの問題文の構造や問題のパターンといった大枠を再度意識した対策を行っていきたい。

また、兎にも角にもリスニングのレクチャーに集中することが重要であり、そのためには、レクチャーの内容に最大限関心を持つようにし、あたかもそれをクラスの中で聞いているかのように質問を考えながら能動的に聞くようにする。レクチャーの大きな構造を頭に置き、レクチャーの内容に関心を

持ち、次の内容を予想したり、質問を考えながら聞くようにすると能動的なリスニングになるだろう。明日からは試験当日まで毎日、三つの問題群、つまり17問を一セットにして対策を進めていく。これは本番で出題される一セットと同じ問題数である。その一セットをできるだけ集中して聞く訓練を明日から行っていく。明日からの対策は量より質を優先させることになるだろう。フローニンゲン：
2018/9/11(火)20:15

3110. 教育哲学への思い

時刻は午前八時を迎えた。今日もまたゆっくりとした起床だった。このところ本当によく睡眠を取っている。これは一体何の兆候なのだろうか。結局今日も九時間近く睡眠を取っていたことになる。レム睡眠とノンレム睡眠のサイクルが一回ほど多い状態がここ数日続いている。

通りを走る車が水しぶきを上げる音が聞こえて来た。今は雨が降っていないのだが、昨夜降っていた雨が道路に残っており、通りを走る車がそれを跳ね上げている音が聞こえて来る。九月の二週目だというのに、今日の最高気温は16度であり、最低気温は6度と非常に低い。

昨日の就寝前に、今の自分がいかに不勉強かについて考えていた。それを考えると、どこか胸が痛むような感覚があった。もっと勉強時間を確保する必要がある。確かにここ最近、文章を書くことと作曲やデッサンなどの創造活動に積極的に従事し、内側のものを外側に形にしていくことは習慣になっている。これは私にとって望ましい習慣だ。一方、それに並行して大切な読書についてはそれを行う時間が減少している傾向にある。ここ二年間は大学院に通っていたこともあり、自然と書籍や論文を読む時間が多かった。

だが、今年の夏にプログラムを終了してからは、少しずつ読書の時間が減っているように思える。その分、日本企業との協働プロジェクトに従事しているのだが、果たしてこのままでいいのかという思いと昨夜向き合っていた。

とにかく教育哲学と人間発達に関する思想的な探究を進めていきたい。今の自分は教育に関して、そして人間発達についてほとんど何もわかっていない。特に教育についてはそうだろう。現代の教育の問題の所在、問題を生み出している要因や構造、そして問題の解決に向けた手立てについて、

今の私はほとんど何もわかっていない。それらについて考えようとするほどに、自分の無知さが明らかになる。

本当に、ここから再度一から教育に関する探究をしていきたいと思う。昨年は実証的教育学というプログラムに在籍し、これまでは科学的なレンズを通して教育を考えることを行ってきた。しかし、もはや科学的なレンズだけを通して教育を考えることに意義を見出せなくなっており、思想的な観点から教育についての探究を行っていききたいという思いで溢れている。昨日か一昨日の日記で言及していたように、英語空間に存在している教育哲学に関する全ての書籍と論文を読みたいという思いが湧いてくる。それを行うための時間を確保すること、それを行うための環境に身を置くことを強く希求している自分がある。今年一年は本当にその実現に向けた準備を進めていく。

昨夜の自分は何か焦りのようなものを感じていた。それを認めた上で、焦らずにゆっくりと進むことを自らに言い聞かせる。教育哲学に関する書籍や論文を激しく読みながら、そして得られた知見や自らの考えを日記に書き記しながら、着実な歩みを実現させていきたい。フローニンゲン:2018/9/12(水)08:28

3111. 学び直しに向けて

教育哲学への想いが募れば募るほど、来年からは再び大学院の環境の中で探究活動に精を出したいという思いが強くなる。一方で、大学院に所属しなくても、在野の立場を維持したまま探究を前に進めていくことはできないかと考えてもいる。

これまでの自分を取り巻く状況は、大学院に所属していない時は協働プロジェクトの案件がどうしても増えてしまい、その結果として学術探究を前に進めていくことがなかなか難しかった。今後も社会的に意義のある協働プロジェクトに参画しながらも、一方で、どのようなプロジェクトに参画するかは慎重に吟味する必要があるだろう。自分の関心に最大限合致し、それでいて社会的に意味のあるプロジェクトに絞って参画することを心に誓う必要がある。そうでなければ、結局数多くのプロジェクトに従事するだけの日々が過ぎていくだけになってしまうだろう。それを何としても避けなければならない。

自分の人生に投げかけられた大きな問い、そして人生が進んでいくに応じて新たに投げかけられていく問いと向き合うことが一番大切だ。そうした問いと向き合う時間、そしてそれらの問いを起点にした探究を深め、探究の成果を社会に還元していくことが何にもまして大切だ。それを行うことが、自分に与えられた役割を全うすることなのだ。

自分がなぜ教育哲学に向かったのかの根本についてはまだわからない。わからないその対象に向かっていく。そして、教育哲学そのものの探究を深めていく。

兎にも角にも、思想的枠組みの幅と深さが欠如している自分に気づく。教育や人間発達に関する問題を捉える際の思想的枠組み、そして問題の改善及び解決に導く思想的枠組みがあまりにも脆弱であることに対して、少々絶望感を抱く。こうした絶望感を抱えながら、日々少しずつ前に進んでいくしか方法はない。教育や人間発達に関する直接体験を豊かにし、先人の知恵を借りるための読書、そして自分の考えをまとめていくための文章を執筆していくことが本当に大切になる。それらのうちどれ一つも欠けてはならない。どれかが欠けている探究者や実践者がどれだけいることか。彼らが犯している過ちに陥らないように心がける。

今日も牛歩の歩みのように、昨日に引き続き、キャサリン・エルギン教授の書籍とシュタイナー教育に関する書籍を読んでいこうと思う。書物と向き合う時間や書物との向き合い方に関しては再考する余地があるだろう。

学ぶことだけしかなかったジョン・エフ・ケネディ大学時代のあり方を懐かしく思う。あの頃は、協働プロジェクトなど一切なく、毎日読書ばかりしていたように思う。あの日々と同じことを希求する自分が今ここにいる。これも一つのサイクルなのかもしれない。今の自分に必要なことは徹底的な学び直しなのだろう。それは教育哲学について学ぶことだけを指しているのではなく、自ら自身を学び直すことも指している。そうした学び直しを行うために、再び大学院の環境に身を置くというのは賢明な方法に思えてくる。フローニンゲン:2018/9/12(水)08:50

3112. 生涯学習の大切な側面

やはり問題は自分の学びが圧倒的に不足しているということであり、その他に問題の拠り所を見つけることは難しい。自分の魂が学びを渴望しているような感覚がするのである。これは精神分析学

的なシャドーの問題というよりも、私の魂の問題であるように思えてくる。あるいは、自分の魂の特質と関係していると言ってもいいかもしれない。

自分がどれだけ無知であるかは自分が一番よく知っている。他者が自分に対して何と言おうともそれに耳を傾けてはいけない。他者は自分を過大評価するか過小評価するかのどちらかしかできないのではないかと思われてくる。自分の身の丈を一番知っているのは自分である、というところまで自己認識を深めていく。

自分の無知さは、社会へ関与していく活動の質に大きな影響を与えている。社会へ関与することは、社会と繋がることであり、同時に自己と繋がることを意味する。その関与の質が低いというのは、社会と自己との繋がりが脆弱であるということの意味する。そして、それが今の自分を苦しめているようなのだ。

社会と自己に深く繋がれない人間存在は本当に孤独なのだと思う。それは自らを深める意味での孤独ではなく、精神病理的な孤独である。

孤独にも様々な種類と質的差異があることを認識しなければならない。自己を深め、社会に深く関与していくために必要な孤独と、自らを蝕んでいく孤独の違いを見分けなければならない。

社会や自己と深く繋がっていくための手段は学びしかないのではないかという考えが芽生えている。しかも、それらとの繋がりをより深くしていくためには、本当に継続的な学びしかないように思えてくる。

一体自分はどこまで学ばばいいのだろうか。その問いに対しては、人間発達の根幹に立ち返ることが肝要だ。

学びは一生継続していく。一生継続く学びを強く希求しているのは自己ではなく、自分の魂のようなのだ。

魂の声に耳を傾けること。多くの人はそれをしない。だがそれをするのがいかに大切なことか。

とにかく私は、自分の魂の声に耳を傾け、その声に導かれるようにして生きていきたいと思う。一生学び続けていくというのは、言葉を変えれば、無知な自分と一生向き合っていくことを意味する。

その行為の尊さと勇敢さについて思いを巡らせる。成人になって以降も学び続けている人を嘲笑するような人もいるかもしれないが、そうした人は結局、無知な自分と向き合うことを暗に避けているのだと思う。もしくは、無知な自己を発見する恐怖とそれと向き合う恐怖を抱えていると言えるかもしれない。自分が学び続ける者であることに対して、世間はいろいろなことを言うかもしれないが、そうした声には一切耳を傾けないようにする。傾けるべき声がなんなのかを自分はもう知っているのだから。

自らの魂の声に耳を傾け、自分の無知さと一生涯向き合っていく。そう決意させてくれるような朝だ。
フローニンゲン:2018/9/12(水)09:07

3113. 短調の曲に関する発見と火災報知器

時刻は午後五時半を迎えた。結局今日は目立った雨は降らず、数分ほど小雨が降る程度であった。相変わらず空は灰色の雲に覆われていて、気温も低い。だが幸いにも、明日からは晴れの日が続くようだ。

今朝は早朝にテレマンの曲に範を求めて一曲作った。しかし、全く思うように曲を作ることができなかった。テレマンの曲のリズムを参考にしようとしたのだが、それを一つの型とすると、そこから自分なりのリズムで曲を展開していくことが非常に難しかった。参考にしていた曲が幾分変わったリズムを持っていたことが、それを参考に曲を作ることを難しくさせていたように思える。

もう少しシンプルなリズムを持つ曲を数多く参考に修練を積む必要があると改めて思った。そうした反省から午後は、ハイドンの曲の中でもリズムの観点から見て参考にしやすいものを選んで曲を作った。その時の試みは比較的うまくいったように思う。ここ数日間連続して短調の曲を作っているのだが、今日作った曲は短調らしからぬ明るさを感じられた。これは一つ大切な直接体験だったように思う。というのも、一般的に短調の曲は暗い印象を与えるものが多いと言われており、それは一般論であると知りながらも、これまであまり例外に出会うことがなかったからだ。そうした例外を自らの手で生み出したことに一つ意味があるように思う。

自分で生み出した曲を何度も聞きながら、短調の曲が持つ新たな側面を一つ開拓したように思う。こうした小さな開拓を日々の作曲実践を通じて実現させていくことが大切だ。そうすれば、少しずつ作曲技術という一つの大きな大地の開拓が進んでいくだろう。

先週からずっと頭を悩ませていた火災報知器の問題がようやく解決した。昨日、不動産屋に問い合わせ、便利屋に来てもらい、火災報知器のバッテリーを変えてもらったのだが、それは根本的な問題解決をもたらさず、引き続き火災報知器の音が不定期に鳴っていた。こうした状況が一週間にもわたって続いていた。厄介なのは、それが不定期に生じるということであり、いつその事態が生じるかわからないということであった。自分なりに色々と解決策を投じてみたが、軒並みうまくいかず、結局便利屋にお願いすることにした。

不動産屋に連絡をする際に、考えられるのはバッテリーの異常ではないかということを伝えていたのは私なのだが、結局その仮説は正しくなかった。根本的に火災報知器を接続する部分の不具合か何かの問題なのだと考えるに至った。

今朝もまた火災報知器に異常が生じ始めたので、午後に意を決して根本的な対策を講じることにした。そもそも、部屋の外の階段の上に付いている火災報知器は何かの役に立つのだろうか、ということを考えてみた。

アパートの各部屋の中にも火災報知器が付けられており、基本的に火が出るような問題は部屋の中で起こるのではないだろうか。廊下に取り付けられている火災報知器の役割を考えてみたとき、それはほぼ不要のものに思えてきた。そのため、すべての火災報知器のバッテリーを抜いてみたところ、奇妙なことに、バッテリーを抜いたにもかかわらず、まだ音になるという事態が継続していた。これは本当に接続箇所の不具合によって音が不定期になり続けているのだと思うに至った。

そこで下手に火災報知器の本体と電源の箇所を触れさせるのではなく、火災報知器そのものを取り外すことにした。全ての階の火災報知器は連動しており、どれか一つ機能していればその一つが鳴る仕組みになっており、不具合を起こしている三つの階の火災報知器を全て本体ごと取り外すことにした。この強硬策によってようやく問題が解決した。ここ最近睡眠時間が長ったのはもしかする

と、心身が季節の変わり目の調整を行っていたというよりも、深夜にも火災報知器から不定期に音が鳴っており、それが寝ている間の睡眠の質を下げているのではないかと思う。

完全に眠りの意識の中にあっても、身体が存在する外部環境の騒音が実は睡眠の質に影響を与えているということも十分に考えられることである。この考えがどれほど正しいかは、今夜の睡眠、及び明日以降の睡眠によって検証したい。フローニンゲン:2018/9/12(水) 17:46

3114. 覚悟について

灰色の雲がゆっくりと空を動いている。その動きはゆっくりだが、昨日の雲の動きよりも確実に早い。

目の前の街路樹の紅葉が一段と進んでいる。昨日から今日にかけて非線形的な変化が起こったようだ。確かに今朝方の最高気温が6度であったことを考えると、このような突然の変化が起きても不思議ではない。

街路樹の葉っぱの先が完全に赤くなっている。じっと葉の様子を観察していると、それがバラのように見えてくる。

いよいよだ。いよいよ北欧に近いこの町で三度目の厳しい季節にこれから入っていく。その覚悟はすでにできている。いや、もはや覚悟を超えた精神的境地を開いたと言える。

覚悟をするというのは、物事のほんの始まりにすぎない。覚悟を持つというのは、物事を真に深めていくために不可欠であるが、覚悟を持つという感覚が持続しているようでは道半ばである。覚悟を超えた段階に至らなければならない。

そのようなことを考えていると、自分の無知さと向き合うことに関しては、本当に私はプロセスの初期にいるのだと思うに至った。いや、そのプロセスは今日から真に始まったと言ってもいいかもしれない。なぜなら今朝、自分の無知さと一生涯向き合っていくという覚悟を持ったからである。自分の無知さと一生涯向き合っていくプロセスが今ようやく始まった。これからの道のりはまた険しいものになるかもしれないが、この始まりを祝いたいと思う。小刻みに揺れるバラのような街路樹がそれを祝っ

てくれている。それだけで十分だ。本当に今日からまた、日々新たに自分の取り組みに従事していこうと思う。

今日は午前中と午後にかけてTOEFL対策を進めていった。リスニングに関しては、問題文の大きな構造を意識することによって、今日はほとんどケアレスミスがなかった。あとは本番でいかに集中して問題文を聞くかが鍵を握るだろう。また、メモを取りながら聞くことは極めて大事なのだが、全てをメモしようとしてはならない。メモを書くことに意識が向かってしまい、問題文を聞き逃してしまっは元も子もない。

メモは本当に重要なポイントだけを単語ベースで書き残していくに留める。間違っても冠詞などを含めて文章を書こうとしてはならない。ちょっとしたフレーズだけで十分だ。メモの取り方にも気をつけることによって、本番では聞き逃しのないようにリスニングを行っていきたいと思う。午前中に行っていたスピーキング対策についても上々の出来であった。

設問1と2において、まだついつい抽象的なことを述べてしまいがちなので、これからの詰めの対策、そして本番ではとにかく具体例や具体的な細かな事柄に言及して話を膨らませていく。とりわけ設問1と2は回答の制限時間が短いため、無理に二つの理由について述べる必要はなく、一つを十分に掘り下げていくということも取りうるアプローチだと思う。

私は英語のみならず、日本語においても比較的ゆっくりと話す傾向にあるため、スピーキングの試験においても無理に二つの理由を詰め込むのではなく、一つの理由を多角的に話していくという方が自分に合っているように思う。スピーキングの中で出題される聞き取り問題もリスニングと同様に、重要なポイントを聞き逃さず、それを単語ベースでメモしておくようにする。今夜もまたスピーキングの対策をし、本番に向けて念入りな準備を続けていきたい。フローニンゲン:2018/9/12(水)
17:54

3115. 真の問題解決を可能にする知性

今日は一日中曇り空が広がっていたが、どこことなく新たな季節の到来を祝福しているかのような雰
囲気があった。それはとても静かな雰囲気であり、落ち着きを持ったものだった。

時刻は午後の七時半に近づいてきている。時折吹くそよ風が街路樹の葉を小刻みに揺らしている。それに呼応して、自分の魂が小刻みなダンスをしているかのようだ。

外側の世界と内側の世界の深いつながりがこのところよく知覚される。そのつながりに敏感になればなるほどに、自分の魂の声がより鮮明に聞こえてくるかのようだ。その声は優しさを持ちながら、同時に本質的な厳しさも持ち合わせている。いや、それは優しさや厳しさという側面を超えて、自己を支え続け、励まし続ける存在だとみなした方がいいかもしれない。今日も自分の魂が絶えず自己を支え、励まし続けてくれたことに感謝の念を持つ。

先ほど入浴中に、個別的な問題解決に向かつてはならず、問題が生じる根本要因を生み出す問題そのものの解決を行うことの大切さに気付かされた。人は目の前に問題が立ち現れた時、その問題を解こうとし、解ければそれに満足をする。そうした問題解決は真の問題解決につながらないのではないかと最近よく思う。企業社会においては、そうした問題解決を専門にする人たちがいるが、結局彼らが行っていることは、個別問題の解決であり、そもそもそうした個別問題を生じさせる根本的な問題構造にまで踏み込むことはしないように思える。

もしそうしたことを行っているのであれば、遙か以前に彼らの仕事はなくなっているはずなのだ。個別問題を解き続けるという専門職が依然として存在し続けていることの背景には、問題解決を専門とする人たちですら、結局真の意味での問題解決に乗り出していないことが一つ大きな理由に挙げられるように思われる。いわばそこで行なわれている問題解決は、発達論的に言えば、モダニスト的な、合理主義的段階による問題解決の域を超えないのだと思う。より高次元な段階における問題解決は、個別問題を生み出しているより大きな根本問題の探究と解決に乗り出していくはずだ。

この点については自分も十分に気をつけなければならない。とりわけ人間発達や教育に関する問題解決において、合理主義的段階の発想による問題解決に乗り出してはならない。それは確かに個別問題を解決してくれるが、そうした問題を生み出している真の要因を解決してくれるものではないため、結局同種の問題が何度も生起する。真の要因を解決するためには、それこそ多数の視点を考慮することを最低限とし、それらの視点が生み出される究極的な一つの—あるいは限りなく少数の—視点そのものにアプローチをしていくことが不可欠だろう。

合理主義的段階の次に来るポストモダニスト的な発想の特徴は、無数の視点を考慮することが可能なことであるが、ケン・ウィルバーの言葉で言えば、その病理的な側面は、「多数の視点に対する麻痺」というものが挙げられる。ポストモダニスト的な発想すらも超え、多数の視点に麻痺することなく問題解決に乗り出していくためには、本当にたくましい知性が必要になるのだと改めて思われる。

フローニンゲン:2018/9/12(水) 19:41

3116. 安全基地の育成

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を開始した。ここ最近では七時を過ぎた起床が多く、その要因として、季節の変わり目による心身の調整と、火災報知器の音による睡眠の妨げを挙げている。

昨日の午後に、ようやく火災報知器の問題が解決し、昨夜はぐっすり眠れた。確かにこれまでも意識上においてはよく眠れていた感覚があったのだが、寝ている最中にも鳴っていたであろう機械音が睡眠の質を下げている可能性がある、ということ昨日の日記に書き留めていたように思う。

今日は再び六時半に起床したことを考えると、どうやら本当に火災報知器の音が一つの要因であったかのように思えてくる。いずれにせよ、昨夜から再び高い質の睡眠を取れるようになって嬉しく思う。

昨日と同様に、今朝もかなり冷え込んでいる。昨夜の段階から冷えていたため、正直なところ、九月に入ってまだ二週目であるにもかかわらず、暖房を入れようかと思ったぐらいであった。暖かい格好をすることによって、暖房を入れることはしなかったが、今日もそうした肌寒さが続く。最高気温は19度であり、今の気温は7度だ。だが幸いにも今日の天候は、雲一つない晴天のようであり、来週からはまた少し秋の暖かさを感じられるような日に戻るらしい。

今視界に入る空はライトブルーの美しさを持っている。フローニンゲンの日の出の時間は随分と遅くなり、七時を迎える頃になってようやく明るくなり始め、朝日が町に降り注ぐのはもう少し後のように思える。

心の中に安全基地を持つことの大切さについて昨日考えていた。それは自分の心の拠り所であり、休息の場所でもある。さらには、その安全基地が起点となって、私たちの新たな挑戦を後押ししてくれる。

昨夜は特に自分の心の中にある安全基地を強く実感することができ、なんとも言えない安心感の中で眠りについた。こうした安全基地も育てることが可能であり、それは教育によって実現されるだろう。もちろん、精神療法によってもそれらを治癒・涵養していくことは可能であるが、そもそもそれは健全な発達プロセスを辿っていれば治癒の対象になるようなものではなく、継続的な教育によって育まれていくものであるように思える。

このところ私は、諸々の自己教育を意識的に自らに施しているが、そうした自己教育によっても安全基地は育まれていく。芸術教育や霊性教育が持つ一つの意義は、ひよつとすると、私たち一人一人の中にある固有の安全基地を育てていくことにあるのではないかと思えてくる。確かに、自らの中に固有の芸術性と固有の霊性があり、それらが自己の魂の拠り所になり得ることを考えると、それらの教育には安全基地を育てていく可能性がありそうだ。安全基地を育ててくという観点で、それらの教育を探究するのも一つ大切な事柄になるだろう。フローニンゲン:2018/9/13(木)07:18

No.1310: Co-evolution and Co-Degeneration of Polarity

I perceived that polarity is omnipresent and that it co-evolves and co-degenerates. Groningen, 16:36, Thursday, 10/11/2018

3117. オーロラのような夕日の美しさ

澄み渡る早朝の空を見ながら、現代社会の有り様についてふと考える。先日、過去に作った曲を聴いている時に、時代の救世主の疲弊ぶりを感ずるような瞬間があった。

現代社会においては、多くの人が精神的にも肉体的にも疲弊しているように思えるが、それは時代の救世主においても同じなのではないかと思っていた。救世主ですら疲弊をしてしまう社会の中に自分が生きているということ。救世主など現れなくなって久しい時代の中に生きているということについてぼんやりと考えていた。

今日は本当に空に一点の雲もない。一日を通してこのような快晴が続くようだ。

時計の針が午前七時を回った時、目の前の通りの工事がゆっくりと始まった。当初の予想よりも随分と時間がかかっている工事だが、それでも着実に進行している様子を見て取ることができる。

近所のスーパーに行く際に、これまでは迂回する必要があったのだが、今はもう歩道の整備は終わり、迂回の必要はなくなった。今月末までに、あるいはボストン旅行から帰ってくる頃には工事が終わっているかもしれない。

自分の内側の世界のみならず、身の回りの世界を観察していると面白ことに気づくことがよくある。昨日の夕方は、面白さという表現では捉えることのできない神秘的な現象を目撃することになった。

昨日は、一日を通して空には雨雲が張り巡らされていた。だが、夕食後には雨雲が徐々に消え、うろこ雲がフローニンゲンの空一面に現れた。そして夕日がそのうろこ雲を照らす様が圧巻の美しさであった。書斎で仕事をしている最中に、ふと窓の外を眺めると、その美しい黄金色の輝きに気づき、私はすぐにその場を離れ、窓際に駆け寄った。そこには息を呑むような夕日があり、その光がうろこ雲を美しく照らしていた。

まさにそれは自然の神秘であった。しばらくその様子を観察し、再び机に戻ってしばらく仕事をしていると、今度は夕日の色が赤紫色に変わっていることに気づいた。時間の経過と共に徐々に輝きに変化し、赤紫色に輝く空は本当に美しかった。それはオーロラのような美しさだったと言っていいたいだろう。

時間の進行と共に変化していく夕日を眺めていると、モネの美しい絵画作品のいくつかが、時間の経過と共に動いていくかのようにであった。自然がもたらす神秘的な美を見ながら、確かに自分の内側には美を感じる何かが備わっており、それは自然の美と共鳴する性質を持っていることがわかった。これは自然の美だけではなく、私たちは美しいものに共鳴するような特殊な性質や感覚を内在的に持っているのかもしれない。昨日見た美しく輝く夕日について思い出していると、このあたりにも美学や芸術・霊性教育を考えるヒントが多分に含まれているように思えてくる。

これから確かに寒い季節に入っていくが、昨日見たような夕日が頻繁に現れる季節でもあることを考えると、それはまた一つの大きな楽しみだ。自然の美を楽しみ、そこから美を感じる人間存在について考えていこうと思う。今日も美しく輝くような一日になるに違いない。フローニンゲン:2018/9/13(木)07:34

3118. 秋晴れの午後より

つい先ほど昼食を摂り終え、これから午後の活動にゆっくりと取り掛かろうと思う。今日まだ九月の第二週目であるにもかかわらず、早くも寒さを感じている。だが、そうした寒さの中にあって希望を見出している自分があるのも確かである。今日の天気は申し分ないほど素晴らしく、晴れ渡る空が自分に希望を与えてくれているのかもしれない。

今はほとんど風が吹いておらず、早朝は特に一切風が吹いていなかった。小鳥たちが木の上で遊んでいるほほ笑ましい姿を見かけた。早朝にはどこか平穏で幸福な雰囲気が出迎えていたのを覚えており、今でもその雰囲気が続いている。念のため確認しておくが、今日は平日の木曜日だ。

欧州で過ごす日々が積み重なっていくにつれて、内なる精神の自由が徐々にもたらされているように思う。日々を落ち着いた環境の中で過ごし、自分のライフワークに邁進していく日々をこれからも送り続けていく。

金銭を獲得するために働くことをやめてから時間が経てば経つほどに、内なる自由がより深さを増していることに注目しなければならない。人間が真に自由を獲得するためには、金銭を獲得するための労働からいかに脱却し、そこからいかに自分のライフワークを日々行っていくかが重要になるのだろう。そのようなことを欧州での生活を通じて頻繁に感じるようになった。

今思えば、日本で働いていた時や米国時代の後半に働いていた時の自分の有り様を信じることはできないが、そうした時代も自己の成熟において必要なプロセスだったのだろう。あの時代がなければ、今の生活はないのだから。

これから午後の取り組みを始めしていく。フローニンゲンの町に降り注ぐ太陽の光を眺めていると、秋の活力を感じる。そして、この土地自体がどこか秋の活力によって満たされているように感じる。そうした感覚を携えながら午後からの取り組みに従事する。

今日は午前中にTOEFLのリスニングセクションの問題を解いた。TOEFL試験の本番は明後日であり、リスニングの仕上がりが良くなったことを嬉しく思う。今日の実感のまま本番の試験で集中して問題文を聞き、ケアレスミスなく解答を進めていきたいと思う。リーディングに関しても午前中に一つ問題を解き、読解の感覚は良好である。先月までGRE試験の対策をしていたことが功を奏し、読解の感覚が依然として高いままに保たれている。あとは本番で落ち着いて問題文を読みながらも、躊躇なく次から次へと新たな問題に移っていくテンポを大切にしたい。

今回本番を想定して三つの問題群を解いたところ、合計で10分ほどの時間が余った。本番もこれに類するペースで問題を解いていきたい。

今日はこれからライティング対策をする。設問1に関しては、もう一度どのような語彙や構文を使って文章を書いていくのかを確認する。また、設問2の自由記述に関しては、これまでとは少し異なり、TOEFLの採点官がとりわけ大切にしている幾つかのポイントをより明確に反映するような文章を書くように心がけていく。特に、出だしに関しては問題文の言い換えから始めるのではなく、自分の主張を打ち出す前の前置きのような一般論を述べ、そこから設問文の言い換えをし、反対意見について簡単に言及し、最後に自分の主張を述べるという形式を意識する。その後の段落では、スピーキングと同様に、抽象的な議論になることを避け、豊富な具体例を用いながら自分の論をサポートしていく。分量に関しては、これまではGREのライティングと同様の感覚で450字ぐらい書いていたが、400字ほどでも十分であるように思える。

字数を減らしたとしても、具体例を減らすことはせず、むしろ論旨のつながりをより明確なものにするような文章を書くことを意識する。明日にもう一度リスニングとスピーキングについては確認をし、明後日の本番の朝も早起きをし、二つのセクションについて準備運動がてら少しばかり問題を解くようにしたい。フローニンゲン:2018/9/13(木) 13:18

A crescent moon showed up in the night sky. Looking at it, I felt as if a spirit of the moon whispered. Groningen, 21:06, Thursday, 10/11/2018

3119. 動き出す予感

時刻は午後三時半を迎えた。これから、教育哲学者のキャサリン・エルギン教授の書籍“True Enough (2017)”の続きを読み進めていく。今日は折り返しの第七章となる。不思議なことに、本書を最初に開いた時は非常に難解に感じられた本書が、章を追うごとに親しみやすいものになっている。本書がまさに私たちの「認識」について扱っているように、本書を読み進めることによって徐々に「認識」に対する自分の認識が深まり、それが本書を読みやすくしているのかもしれない。

また、そもそもエルギン教授の仕事に私が大きな関心を示しているということも重要な要因だろう。いかなる探究にせよ実践にせよ、内的動機がいかにほどかがその習熟に大きな差をもたらす。本書の一読を終え、二読目をした上で10月の第一週にエルギン教授と面会ができそうだ。

今日は昼食前に、シュタイナー教育の学年ごとのカリキュラムの内容が詳細に紹介されている“The Tasks and Content of the Steiner-Waldorf Curriculum (2014)”の一読を終えた。本書は本当に洞察に溢れる内容であった。単純に各学年ごとのカリキュラムの内容について学ぶことができただけでなく、発達理論上のいかなる理由によってそのようなカリキュラム編成になっているのかを学ぶことができた。シュタイナーは優れた教育哲学者であり、かつ優れた発達論者でもあった。人間発達に慧眼を持っていたシュタイナーの教育実践に関してますます関心が高くなる。

これからエルギン教授の書籍を読み、夜に時間があれば、ハワード・ガードナー教授の“The Unschooling Mind (1995)”の続きを読み進めていきたい。日本では、ガードナー教授と言えば多重知性理論に関してしかその仕事知られていないかもしれないが、私が最も敬意を表しているのは多重知性理論よりも、ガードナー教授の哲学的な仕事である。人間発達と教育を中心に据え、真善美について、倫理や道徳について、あるいは学校システムそのものに関する一連の哲学的な仕事の功績をないがしろにすることはできない。

ガードナー教授は一般書の出版に関して非常に多産であり、今はまだ出版されたうちの六割ぐらいの書籍しか手元にない。手持ちの書籍を読み終えたら、ぜひその他の書籍も積極的に読み進めたいと思う。今月末から10月の初旬にかけて、ボストン及びハーバード大学教育大学院(HGSE)を訪問する際に、ガードナー教授とは今回スケジュールが合わなかったが、またどこかの機会に話をする機会を得たいと思う。

ガードナー教授はHGSEで教鞭をとるのは今年で最後だということをメールで教えてくれた。ここ数年の間に提供されていた真善美に関するクラスを聴講することがもはやできなくなってしまったことは残念だが、教鞭をとるのは今年で最後なだけであって、まだまだ研究や実務的な活動は続けていくそうである。

今回面会の機会を得ることはできなかったが、その代わりに私の関心に合致する幾人かの教授を紹介してくださった。それはどこか今から五年前にカート・フィッシャー教授がポール・ヴァン・ギアート教授を紹介してくださり、そこから自分の人生がまた新たに動き始めたことと似ている。今回のHGSE訪問によって、また自分の人生が新たな方向に向かって動き出すかもしれない。

書斎の窓から外を眺めると、今日は天気にも恵まれ、散歩日和であることがよく分かる。小鳥が嬉しそうに歌い、散歩を促している。彼らは喜びの中で飛び、私も同じことをしたいと思う。フローニンゲン：
2018/9/13(木) 16:03

No.1312: An Energetic Day

A new energetic day began. As well as yesterday, I'll devote myself to my lifework today.

Groningen, 09:12, Friday, 10/12/2018

3120. TOEFL対策の仕上げ

時刻は午後八時半に近づきつつある。今窓の外を眺めてみると、この時間帯にようやく日が沈むことを知った。確かに夏の間はもっと遅くまで日が出ていたが、秋に入った今の時期においてはちょうどこの時間帯が日が沈む頃なのだと今日確認することができた。

明後日はよいよTOEFL試験の本番があり、明日はアムステルダムのホテルに前泊する。以前宿泊したホテルを予約することができなかったが、そのホテルの近くであり、なおかつ試験会場に程近いホテルを予約することができた。

明日は午後三時過ぎの列車に乗ってフローニンゲン駅を出発し、六時前にホテルに到着する予定だ。明後日の早朝、そしてホテルに到着してからもTOEFL対策の詰めを行っていきたいと思う。

今日はスピーキングセクションとライティングセクションの仕上げの対策を行った。本番の時にいくつか気をつけたいことがあるのでそれらを書き留めておく。まずスピーキングセクションの設問3と4においては、とにかくまずは集中して提示された文章を読むことが大切だ。いつもは提示された文章をメモすることに集中してしまい、文章を全て読み終えることができず、結局そのあとに続くリスニングの内容がすぐに頭に入ってきにくいということが何度かあった。それを防ぐためにも、まずは集中して文章を読み、文章を読み終えた後の短い時間を使って、最重要な箇所だけメモするようにする。こうすれば、文章を読んでいる最中にリスニングの内容についても予想が付き、聞き取りがしやすくなるだろう。この点を意識して明日の朝、そして明日の夜のスピーキング対策を行う。

ライティングセクションに関しては、設問1において、これまでは読解文の内容については自分の解答の各段落の最初の一行でしか触れていなかったが、二行ほど触れるようにする。この設問におけるメインはあくまでも聞き取った文章の方だが、それでも読解文と聞き取り文を橋渡しすることがこのセクションの大きなポイントであるため、読解文についてはこれまでよりも一行ほど多く言及するようにする。そうすれば、両者のバランスがより良いものになるだろう。これまではあまりこの点を意識しておらず、読解文への言及が少しばかり不十分だったように思う。その点がライティングセクションで満点を取ることができていなかった要因のように思える。もちろん、読解文へ言及する際には、文章をそのまま書き写してはならず、自分の言葉で言い換えをしながら言及していく必要がある。

おそらくこの点についてはもう一度、明日の夜にホテルに到着してから確認したいと思う。読解の文章への言及をこれまでよりも一行ほど増やし、リスニングで聞き取った内容を十分に盛り込んでいく。その点がポイントになるだろう。

先月受験したGREと同様に、今回のTOEFLをもって最後としたい。もちろん、今後も隔年か不定期に自分の英語力を確認するためにTOEFLを受けることがあるかもしれないが、もうすでに十分な得点を獲得しているため、そうした確認さえもあまり意味をなさないようになってきている。そうしたこともあり、今回の試験を最後とし、最後の試験で納得のいくスコアを獲得したいと思う。フローニンゲン：
2018/9/13(木)20:34

No.1313: Whirl of Withered Leaves

The season when withered leaves whirl around in the wind has come. It means that something inside myself deepens. Groningen, 10:59, Friday, 10/12/2018